

東北生活文化大で服飾文化を専攻する学生たちが23日、在宅緩和ケアに取り組む大崎市古川の穂波の郷クリニック(三浦正悦院長)に、ボランティアの演劇で使用する赤鬼、青鬼の衣装を寄贈した。

同クリニックにはリハビリ患者や地域のボランティアが参加する「ほなみ劇団」が開業当時からあり、命をテーマにした演劇を県内外で行っている。劇で使う衣装は、主に寄付されたものを補修しながら使い続けている。

そこで、クリニックの職員を通して活動を知った同大家政学部家政学科服飾文化専攻の学生有志15人が学習で

学んだ技術を生かし、劇団の主役である赤鬼、青鬼の衣装を制作。

ボランティア劇団に役立てて 鬼の手作り衣装寄贈

東北生活文化大生が穂波の郷クリニックへ

約3カ月かけて完成にこぎ着けた。

衣装は、かつらやし

新衣装を披露するボランティアと学生たち



で行われた寄贈式では、関係者約50人を前に劇団員がオリジナルの劇を披露。劇中、村の若者役で出演した学生たちが、新しい衣装を鬼役のボランティアに手渡した。

鬼たちは早速新しい衣装に着替え、出席者に披露。「とても着心地が良い。大切に使用させていただく」と感謝を述べた。

10年前に家族が同クリニックの緩和ケアで世話になったという同大2年の亀谷菜月さん(20)は「10年越しに恩返しができて良かった。こんなに温かい雰囲気のところには真獻できて、すごくうれしい」と話していた。

ヤツ、ズボン、トラ柄のパンツなど。速乾性や動きやすさを考えた生地を使い、刺しゅう用ミシンで背中に「ほなみげきだん」のロゴ

や鬼の顔をあしらった。鬼のワッペン、衣装を収納するトートバッグも用意した。

同クリニック敷地内にある「赤おに広場」